



● 李相哲 著

『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』 (角川学芸出版 2500円、税別)  
 『満州における日本人経営新聞の歴史』 (凱風社 4400円、税別)

本書二冊は十九世紀後半から二十世紀前半、日本のメディアが国外でいかなる発展を遂げたかを示す歴史を明解に論述している。

蛭原八郎『海外邦字新聞雑誌史』(一九三六年)を源に、日本人移民が多かった北米やハワイ、南米で発行された日本語新聞の研究は「聴きとりでつづる新聞史」(『別冊新聞研究』、日本新聞協会)をはじめ、田村紀雄・東京経済大学名誉教授、白水繁彦・駒澤大学教授らの労作がある。『戦争と新聞』(朝日新聞社、二〇〇八年)のように、満州や南方への新聞進出を描いた著作も刊行され、若い研究者が関心を持つ領域になりつつある。

『満州における日本人経営新聞の歴史』は著者の博士論文(上智大学)を基に出版された極めて領域を絞った学術書のため、『朝鮮における日本人経営新聞の歴史』の方が一般には読みやすい感がある。とはいえ両書とも膨大な原資料(ここでは主に当時現地で刊行された新聞)を発掘し、発表したことはアカデミックな研究のみならず、高い評価を得るものである。

またそれらに基づき、当時の新聞ジャーナリズムの実態を分析、経営者の報道姿勢のみなら

ずさまざまな関係者の思惑、政府との関係、さらには植民地政策を絡めて社会を描き出している。「ありのままの事実をつづる」という原点に立つ貴重な書である。

舞台は現在の中国東北地方。日本が満洲国というかいらい国家をつくったことから、中国国内では「偽満」と呼称する教育を受けてきた者も少なくない。その地で、日露戦争(一九〇四～〇五年)直後から一九四五年まで日刊の日本語新聞が五十五紙も発行されたという。

戦前の満州、朝鮮で日本語新聞、取りも直さず日本人経営の新聞が多く発行されたのは、大東亜共栄圏構想に端を発する植民地政策の結果であるということ否定するつもりはないが、新橋駅で釜山や平壤、大連、ハルピン行きの切符が買えた時代にあつて(九六)、国策会社と言える南満州鉄道株式会社(満鉄)の存在が新聞事業にも大きな影響を与えたのもまた事実である。

草創期は『満州日報』(一九〇五年)を創刊した中島真雄に代表されるように、個人経営の新聞の時代であった。続く時代の新聞は『満州日日新聞』(一九〇七年)のように満鉄傘下に

置かれた新聞が多く、それはやがて一九三一年の満州事変を機に関東軍主導下に一元化された。そして消滅の時を迎える。

一方、朝鮮の新聞史を見ると、近代新聞成立期に福澤諭吉の命を受けた井上角五郎らが『漢城旬報』(漢語、一八八三年)を創刊したことなど、日本人が深く関わった。前書と同じ日本人経営の新聞といっても、日本語新聞ばかりでなく、朝鮮語(ハングル語)、英語の新聞が含まれる。清国の影響力排除を目的として新聞が刊行されたかは別としても、その歴史的背景から、朝鮮における日本人経営の新聞、日本語新聞の存在と影響は満州とはまた異なるものであった。

朝鮮総督府が武断から文化統治に切り替わる中、新聞界は抵抗しつつも見事に対応してゆくさまを、著者は丹念に検証している。四二年の新聞統廃合 戦争協力への道は日本国内と同じ過程を示し、新聞事業とそれを取り巻く一時代の終焉で本書は帰結する。

この二書を読み、読者は何を思うだろうか。日中韓の歴史解釈はともかく、戦前の外地という限定的空間における新聞メディアの栄枯盛衰を通して、中国(人)、韓国(人)にとって日本(人)という存在が何であったのか。またその逆の立場ではどういう存在だったのか。それは言うまでもなく、過去のことではなく、現在、将来に延々と続く問いなのである。

(鈴木 雄雅 上智大学文学部教授)